

3 男装の麗人・川島芳子

錯覚と霧の中で

アリスト・パーネスの『女の議会』

で、プラクサゴラは、「男子はすべから  
く女子に国政を委ぬべきだと、私は主  
張する」というが、イスラエルにおい  
て、インド、セイロンにおいて、アル  
ゼンチンにおいて、そして現在、特に  
イギリスにおいて全的にそれは実現し  
ている。女王と女首相の国の戦闘部隊  
は何よりも勇猛で、迎え撃つ情熱のタ  
ンゴの国の兵士の胸にも、今なお熱く  
エバ・ペロンの神話が生きていて、も  
しエバありせば、このような屈し方は  
しなかったのではなかるつか。

明の才人、李汝珍は『鏡花縁』とい  
う奇書の「女兒郷」の中で、……古書  
に、「女が外で働き、家事は男の仕事」  
とあるを見て、そんなバカなことがと  
思っていたが、とうとうそんな国に来  
てしまった……と述べ、それどころか

その国では、男のほうが纏足している  
のに驚くが、秋好馨の『ますらお派出  
夫会』や古谷三敏『タメおやじ』、シヨ  
ージ秋山『ムムシくん』を見たらど

う思うだろうか。そういえば、新宿ム  
ーランルージュのサヨナラ公演『不自  
由学校』（小崎政房演出）では、夫が、  
妻のパンティをミシン掛けしている場  
面で開幕したっけ。

「女子は男装し、男子は女装すべし」  
とは、大帝エカテリーナ 世の揚言す  
るところだが、なるほど日本でも、神  
功皇（后神功天皇であるとの歴史家の  
説も多い）は男装して新羅を征し、ヤ  
マトタケルは女装して熊襲・カミノタ  
ケルを討つ。勇者ヘラクレスは女装  
し、クレタ島のリグドゥスの娘イピス  
は男に変身する。ポーランド農民蜂起  
の一八四六年、ガリチア反乱で伝説的  
英雄となったエドワルト＝デンボフス  
キーは女装して警戒網を突破し、ドム  
レミイ生れの奇蹟の少女ジャンヌ・ダ  
ルクは男装して精鋭を率い、シャルル  
七世の危難を救う。

意外や意外、真犯人は？ 最後の息  
詰まるドンデン返し……これこそ、推  
理もの、謎解き、探偵小説の醍醐味で、  
これがないと、派手なアクションがあ  
ってもつまらない。歴史や日常的現実

にも、人の真実とか歴史の背景にも、必ず、知られざる真相とか真犯人があつて、それをしも日々現在においては、すべて霧のままに生きていることになる。政治から男女夫婦、肉親知己の仲間にも、知られざる真相やドレン返しはつきもので、我々はただ、お互い錯覚の中で生きていることであるらしい。

男は本当は女なのかもしれない。女は、本当は男なのかもしれない。ということでもなかるうが、戦後、いちはやく大辻司郎(「もくせい号事件」で大島三原山に遭難死)は、少女風のオカッパ頭をし、花森安治はグロだといわれようとスカート穿いた。「女にはズボン、男にはスカート……女には、下半身を露出するスカートより包み込むズボンが、男には(出っ張りがあるのぞ)そこを圧迫するズボンより股間を開放するスカート形式が多く望ましい」と、SF的戯文としての魅力を持つ『スカートへの不思議な郷愁』の中で、イワン・イワノフスキイ氏著『服装解剖学論』中から引用している。但し、イワン・イワノフスキイをまとも信用してはいけない。この著は

九九五年版なのだから(一九九五年は誤植ではない。念のため。ちなみに、同文中には『ノッピン語語源大辞典』などの引用もあるが、これも一九九九年版とある)。思えば、『暮しの手帖』が創刊されたのは基本理念に、この「スカートへの郷愁」あればこそ、だったのである。

妻が男装し男言葉をつかい、夫が女装し女言葉をつかう。さぞや奇異なる風景に映るかもしれないが、これは、なにも女上位風潮のナウイクリスタル感覚のプリリアントなデジタル感覚とこののではなく、女子供は黙れ!と一喝されつ放しだったあの大日本帝国時代の戦火のさなかに、颯爽とまかり通っていたのだ。貞淑な大和撫子とのみ思い込むなかれ、戦前の女子は、ヘルサイユの薔薇・オスカルなぞより、はるかに規模雄大、猛く雄々しく、而もそのスケールの大きさは、各面に於て、はるかに男性の域を超えた存在でもあり得た。

今回の川島芳子のケースも、その典型的例証の一つといえる。

東洋のマタ・ハリ

ドンデン返しの意外性という小ことで、戦争をめぐり二人の女性の運命的ドラマを見てみよう。一人は一世を風靡した女優であり歌手である李香蘭であり、一人は今回のテーマである東洋のマタ・ハリと喧伝された伝説の妖花、川島芳子である。

満蒙軍を率いての騎馬女王、あるいは孫文の息子・孫科を手玉にとって諜報活動した伝説の女性として、その人気もまた李香蘭とは別種の超然たるもので、東京裁判のあの田中隆吉少将以下、高級軍人、大陸浪人の大物たち、ことごとくが彼女の破天荒な麗姿の前に拝脆したのである。

李香蘭が満映のトップスターとして長谷川一夫との名コンビで大ヒット作を飛ばしつづけた頃の彼女の人気は、その層の厚みと幅の広さからいって、山口百恵でさえ三舎を避ける国民的な熱狂ぶりであった。彼女ほど見事な北京官話をこなす支那人はなく、彼女ほど見事な日本語を語り歌え、彼女ほど板についた支那服を着こなせる女優はいなかった。彼女が実は満鉄社員・山口文雄の長女で、李際春將軍の養女として李香蘭を名乗るが、ほんとは日本娘であるとは、わずかの関係者を除いては誰も知らぬことであった。

一方、昭憲皇后役や女王蜂役者で新東宝の屋台骨を支えた高倉みゆきが熱演した『戦雲アジアの女王』で演じた男装の麗人スパイ川島芳子は、三千の

彼女は一九〇六年に生れ、それを、ヒドクレイロー、「ひどく玲瓏」とする所以でもある。だが皮肉なものである。その川島芳子が何を隠そう、滅びたとはいえ、清王朝八大王家の筆頭の名門、肅親王の第十四王女であったとは。その肅親王と義兄弟の仲だった、信州・松本出身の大陸浪人、川島浪速の養女として日本の跡見女学校や信州・松本高女等に学び川島芳子（ほんとは、彼女を男として育てたかった養父が、理想とする大石良雄の名をそのまま良雄と名乗らせようとしたが、それはあまりだ、との周囲の声に、仕方なく良子にしたのが、いつしか芳子として通用するようになったという）を名乗るが、本当は満州王朝の姫、愛新覺羅頭仔、馬賊の頭領としての別名、金璧輝

將軍その人であることは、李香蘭の場合ほどではないにしろ、一般にはあまり知られていないことであった。

刑場で銃殺される(実質的故国は、それでも谷深い日本の信州であったはず)。

姑娘(クーニャン)であったはずの娘が日本人で、日本娘であったはずの女が実は姑娘であった、という、戦争下でのドンデン返しである。廬溝橋事件から支那事変へと拡大していく中で、この運命の二人の劇的な出会いがある。李香蘭の義理の父(李際春ではなく、潘という官吏で天津市長にもなる)が紹介したらしいが、十四歳年長の芳子のリードで、二人は義兄妹になる。乾哥哥(カンコーコー)、乾妹妹(カンメイメイ)と呼ぶ。注目してほしい。義姉妹ではない、義兄妹なのである。レズを連想しても当たらない。芳子は男装し、キミ、ボクの男言葉をつかいこなし、馬にも乗るし関東軍に請うて三千の実戦部隊を引き具した男の中の男ともいえたのだから。

運命の苛酷さが、いたずらか、李香蘭が実は日本人であったが故に命助かり故国へ帰り(実質的故国は、それで

北京獄舎の中で一発の銃声がひびいた。翌朝の新聞の特大の活字が「女傑・金璧輝・銃殺さる」とセンセーショナルに報じ、読者は息をのむ。看守長の談話を渡辺竜策著『川島芳子』から引用すると、「呼び出された金璧輝は充分の覚悟ができていて、実に立派なものであった。最後の望みはときくと、父から送られた白絹の下着をつけて銃殺されたいと希望した。それは許されない」と答えると、彼女は素直に承服した」とある。遺品の衣服の袂の中に遺筆として、

家あれども帰るを欲せず  
涙あれども泣く所を得ず

とあった。この句は、日頃の愛誦の言葉で、後年、昭和三十二年に建てられた松本市正勝寺の墓碑裏に、その言葉が刻み込まれ現在に至る。

も中国であったはず)、川島芳子は実は満州人であったが故に漢奸として北京

東洋のマタ・ハリ……そういえば、本名マルガレータ・ゲルトルト・ツエレ、第一次大戦中のドイツの高名な女

スパイ、マタ・ハリも、パリはムーランルージュで人気を集めた国籍不明の妖艶なダンサーであったが、スパイ容疑で逮捕、銃殺される。ここで想起するのはマルレーネ・ディートリヒ演ずる往年の名画『間諜X二七』である。最後の思い出にと、日頃好んだ『ドナウ河の漣』をピアノで弾じ、看守の美男将校の差し出す軍刀の刀身に顔を映して髪を整え、物憂い表情で煙草をふかし、ゆっくり部屋を出て行く。しばらくの間、そして銃声がひびく、あの名場面を思い出される方もいられることと思う。ディートリヒの名演と重なり、その最期のさまも芳子とマタ・ハリは共通している。

#### 政略結婚の果てに

川島芳子は生涯独身であったように思う人が多いようだが、短いながら、彼女には立派な結婚歴がある。典型的な政略結婚である。養父・川島浪速は義兄弟の肅親王と共に、満蒙独立運動に奔走していた。当時、蒙古に、有力な土豪、パプチャップという熱血漢がいた。興安嶺の西北からコンロン山脈

にかけての地域に出没する馬賊の頭目で、日露戦争中には日本軍の特別工作隊満州義軍に参加してロシア軍の後方を脅かし、その後、外蒙独立軍に参加したり、同時に清朝回復の機会をもねらっていた。事実、大正五年六月に拳兵し、「勤王師扶国軍」の大旗をチャハル河畔にひるがえしたのである。敵はまさに本能寺、といった勢いで、清朝を倒した袁世凱打倒を期しての拳兵であったが、さしあたっては満州の張作霖を討たねばならない。その本拠、奉天を攻めたのである。しかし、結局は、パプチャップは他の戦場であったが流弾で戦死、雄図はむなしく崩れ去った。このパプチャップと肅親王、川島浪速とは当然密な関係にあり、彼の死後、遺族は旅順の肅親王家に引き取られ、

長女は王家の第九王子に嫁し、三人の男の子はみな日本の陸軍士官学校を卒業する。その次男、カンジユルチャップが川島芳子の結婚相手になった。実父・肅親王と、亡きパプチャップの遺志と、養父・川島浪速の青雲の大望とが、この結婚でいよいよガッチリ固まることになるはずであった。昭和二年

十一月、旅順に於て、芳子、花の二十歳。ところが芳子は並みの女ではない。小柄だがキリリとした品位ある美貌としなやかな体の中には、男以上に激しい血をたぎらせていた。一方、カシミアのジャケットは、パプチャップの血を享け日本の陸軍士官学校に学んだくせに、その体内には、女のような華奢な、優柔不断な血が流れていた。まさに、「女子は男装し、男子は女装すべし」の典型ともいふような夫婦ともなつて、それはそれなりに円満に運んだかもしれない。妻が男装して夫となり、夫が女装して妻となる。イギリスのエリザベス女王やサッチャー首相夫妻を考えれば、夫が妻の臣下で部下なのだから、精神的にはこのような倒錯した夫婦であるといえるのではなからうか。

芳子は、自らの結婚生活については語つたことがない。「生涯独身で……」といいきるほどだから。ともかく、芳子の血の中にも実父や養父の志が深く流れていて、そのための大きな支えとなるはずであった夫を不甲斐なしとして、結婚翌年、張作霖の爆死事件を機に、わずか半年ほどの生活を経て、これを見限る。期すところあって、日本は東京・池袋で流浪の身であった兄、憲立の所に身を寄せる。それから飄然と上海に渡る。当時の上海は、国際諜報戦とテロの本場で、藍小姐、黄八妹、陳香淑・香蘭の姉妹等々、スパイ史上に名を留める中国側女探たちの秘密組織が、他の追隨を許さぬ活躍をする舞台でもあった。この時、日本陸軍特務機関に、利権者として知られた田中隆吉少佐がいて、芳子と少佐は急接近する。昭和七年の上海事変は、少佐と芳子の合体で画策されたものであるとされる。この間の経過は、一編のスリルに満ちたドラマをなすが、本稿では割愛せざるを得まい。川島芳子には、一方、意中に深く秘めた恋人がいた。信州・松本の連隊旗手をしていた山家享少尉、日米の混血青年だといふ。少尉は養父の家によく出入りしていて、まだ少女時代の芳子とも知り合い、芳子の初恋の人として名を留めることになる。二人の恋愛事件は新聞ダネにもなり、養父の怒りに、少尉は、自ら身を引く姿を隠してしまう。そして時移り、舞台は代り、日中戦争下の昭和十三年、

北京に暗躍する謎めいた男、王嘉享と  
いうのが王公館（ワンチャホン）とい

懇願で、且ての恩義もあり、預かるこ  
とにする。ところが……

う邸宅を構え、日夜、美女連の出入り  
で瞭乱と花咲く賑わいを見せた。日光、  
陳雲裳といったスターたちに伍し、李  
香蘭の姿も交っていた。この家の主、

……山梨県甲府の山中で、腐った人  
間の生首を犬がくわえてきた。近くで  
首吊りした男のものであった。この自  
殺者が山家であった。太宰のように、

王嘉享というのが、曾ての山家少尉、  
今は北史派遣軍司令部報道部中国班  
長・山家享少佐その人であったのだ。

女と道連れ的首吊りであったが、女の  
死体は崖下に落ち、川下に流されてい  
たという。昭和二十三年、このいたま

李香蘭が満映入りした直接の紹介者は、  
この山家少佐であった。なぜか、川島  
芳子は、この折の彼には近づいていな  
い。しかし、李香蘭と彼との仲を聞き  
知って、後年、李香蘭自ら、「山家少佐  
は川島芳子さんの初恋の人で、わたし  
は芳子さんからすごく恨まれました」  
（『中国』昭和四十五年十月号）と記憶  
を語っている。義妹が義兄を裏切った

しい事件と同じ年に、芳子は銃殺され  
る。異端の結婚と異端の愛……その悲  
劇の結末もまた異端の幕切れといえる  
のであろうか。新聞社から李香蘭に山  
家の死を知らせる電話があって、山家  
の娘さんはあなたとの間に出来た子で  
はないかと聞かれ、彼女は強く否定し  
たという。ともあれ、一切は歲月の彼  
方に忘れ去られていく。

というのだ。山家少佐は、二重スパイ  
だという、ある女優の東条英樹あて密  
告で失脚、名古屋に送られ獄囚となる。

運命は劇的にしてドラマチックであ  
る。戦後、日本人であることが分って  
助かり、帰日早々の李香蘭の所に、乞  
食同様に零落した山家が訪ねてきた。  
娘だけでも預かってくれとのたつての